陳　　情　　文　　書　　表（２２－３－その２）

１　受理番号　　陳情第８号　令和４年８月２２日受理
２　件　　名　　君津台の大関・新関の環境を守り、地球温暖化防止策の推進を願う陳情書
３　陳 情 者　　住　所　　君津市君津台１－３－３
　　氏　名　　坂井　昭

４　趣　　旨

君津市君津台の中央に位置する２つのため池は、北側が通称「大関（おおぜき）」（正しくは「大関谷池（おおぜきやついけ）」。通称「下堰（したぜき）」）、南側が通称「新関（にいぜき）」（しんぜき。正しくは「新関谷池（にいぜきやついけ）」。通称「上堰（うわぜき）」）と呼んでいます。本市のホームページでは「君津市の２０世紀遺産」の１つとして紹介されています。新関は戦国時代に、大関は平安年間に水源として原型が造られたと伝えられています。江戸期は坂田村の主要な灌漑用水として用いられ、昭和５０年代以降はその役割を終え、君津台団地（当初は「坂田」の住居表示。その後、君津台１丁目～３丁目の表示となる）が構成されるとともに、同地の憩いの場とされてまいりました。

それら２つの堰の動植物をめぐる相の変化は、詳しく観察をした平成８年（1996）～令和４年（2022）８月までの２６年の間にきわめて大きな変動がありました。２つの堰と周辺をめぐる稀少、貴重な動植物の例として、①大関南側のハンゲショウの一大群落（最盛期は１２ｍ×３０ｍ＝３６０㎡の面積の群落、現在は３ｍ×１０ｍ＝３０㎡という１０分の１以下の面積にまで消失、絶滅寸前の状態に縮小）②水生植物のガガブタ（上下の堰にあったものの、ともに令和２年頃に絶滅）③水生植物のササバモ（下の堰のみに見られましたが、これも令和２年頃に絶滅）④貴重なチョウトンボ（数が激減するも令和４年に少数の生息を確認）がありました。

絶滅したものに②と③の水生植物があります。もともと発生の範囲・面積が限られたせいもありますが、いずれもミシシッピアカミミガメ（北米原産の外来動物。上下の堰で生息が確認できますが個体数は不明。３０個体くらいか）により食べ尽くされたとみられます。

残存例として、①は、セイタカアワダチソウ等の繁茂によりハンゲショウの生える範囲が狭められたこと、草刈りを平成２２年の夏を最後にしなかったため日差しが当たらなくなったことが要因として挙げられます。④のチョウトンボの個体数の減少は、食物連鎖の崩壊と水質の悪化によるものと考えられます（地球温暖化による影響とはいえません）。

新関の水は昔から水底で湧き水が出ていることにより、水質の良さを誇ってきました。これまで水中の魚が水中の酸素欠乏で死ぬということは１度も見られませんでした。ところが、本年８月１７日に新関の北端の岸辺でアオコが発生するということが起きました。水面の状態を撮影し、外気温度・水温を計り、水を採取し、緑色の微細な藻の状態と生臭いアオコの匂いを確認しました。以降の日もアオコは大発生し、天候の良い日には池の面に広がりを見せています。新関池でのアオコの発生は、堰・池が果たしてきた住環境として最悪の状態になったことを意味します。その原因は、新関の池に注ぐ湧き水の量が少なくなり雨水に頼るようになったこと、地球温暖化で８月以降の水温が外気温３２℃の場合、２８℃～２９℃という異常なまでの温度に達するという状態が主要な原因と言えます。

日々の天候にもよりますが、アオコが大量発生しますと、下の堰である大関にもそれが流入して同じ状態となり、上下の堰ともに生息する魚（ブラックバス、ブルーギル、コイ等）が大量死して浮き上がり、君津台の住宅地全体に驚くほどの異様な悪臭を放ち、日常生活にも大きな不快感を与え、きわめて大きな問題となります。君津台の新関に発生したアオコの除去・防御策に取り組まれることを願います。また、それが、かろうじて堰に遺った貴重な動植物の生態の保護・保存にもつながり、君津市が地球温暖化の対策を大きく推進していく契機になればと、ここに陳情いたします。

５　付託委員会　　建設経済常任委員会